慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シャール・エフ・ジャン『前第二十世紀より前第十三世紀に至るフェニキヤ』
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.2 (1936. 7) ,p.163(331)- 185(353)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19360700-0163

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャール・エフ・ジャン『前第二十世紀より前第十三世紀に至るフェニキヤ』

間崎万里

はしがき　表題の記事は本誌第十四巻二號(九五―一〇〇頁)に譯載したる『最近の發掘より見たる前第三千年紀に於ける印度とスメル』の姉妹篇であつて、前記『ヨーロッパ文明』第一卷(一二四九―一二六八頁)に附載せられてゐるものであるが、前回と同じく同書紹介の意味を兼ねこゝに譯載することにした。但し脚註は一般には利用し難いので大部分省略に附した。

右記事はラス・シャムラとミネト・エル・ベイダに於ける一九三三年七月に至るまでの發掘成果の大要を說いたもので右發掘により暴露せられたフェニキヤ文明の最古の狀態を知り得るのである。その後なほ發掘は繼續せられたので、筆者も斷つてゐる如く、最後の結論に達するまでには、なほ幾多の疑問を殘してゐるが、目下の所はこれだけの知識で滿足すべきである。

ラス・シャムラとミネト・エル・ベイダの發掘

ラス・シャムラ(Ras Shamra)(一)はシリヤの北海岸に位し、ラタキヤ(Latakia)を距る二キロの地點にある。その西方約一百米の處に、今日ミネト・エル・ベイダ(Minet-El-Beida)(二)と言はれる小河(Creek)があるが、この小河は紀元前第三千年紀の昔には、よく取り圍まれた大きな灣であつて、ラス・シャムラの港になつてゐた。

(一)　史學第十卷一號二八頁の地圖を見よ。

(二)　周圍の斷崖の色合から『白い港』を意味する(原註)。

一　歷史と文明

『慈悲深き神々』(Gracious gods)の詩と唱ふる詩(一)は、宗教的儀式の一部を形成してゐる一種の祝詞(ノリト)であるが、その細かい記述の中には、古代フェニキヤ人の故郷に關聯のある頗る重要な資料を含んでゐる。このテキストの研究は次のことを證明する様である。卽ち前第三千年紀の以前に方り、「舊約聖書の Negeb ha-Kereti であることの疑はれない」ニゼブ(Negeb)と、その海岸にあるガザ(Gaza)及びアシュドド(Ashdod)、並に紅海を緣取れる地域とは、フェニキヤ人の國土を形成してゐた。それよりフェニキヤ人は前二〇〇〇年頃、ラス・シャムラに到來したのである。

この新資料は、フェニキヤ人の最も古い＝之がフェニキヤ人の原住地に關係してゐるので最も古い＝傳說を說いてゐるこの『慈悲深き神々』の詩が、それよりももつと後の時代の詩の中にその名が出てゐるバール・ハダド(Baal-Hadad)のことを記してゐないことの理由を說明するものである。この神はフェニキヤ人がレバノン(Lebanon)に到來した時、禮拜する様になつたものに相違ない。南方から渡來した彼等が、北地のバール、換言すれば「恐らくバール・レバノン(Baal-Lebanon)と同じ神であるらしい」ツァフォン(Tsaphon)(北を意味する)のバール、卽ちバール・ツァフォン(Baal-Tsaphon)に變形したことは想像し得るところである。

この假說によれば、前第十二世紀の初、フィリスチナ人(Philistines)がアシュドドからガザに至る紅海沿岸の地を占據した當時、フェニキヤ人は既にニゼブの地を失つてゐたに相違ない。斯くし

(一)　この詩はラス・シャムラで發見せられ、M. Virolleaud により公表せられたもので、同氏と M. Dussaud により論議せられてゐる。(Revue d'histoire des religions, ciii. 1933, 6 et seq.)(原註)。

てエーゲ人は、北方でフィリスチナ人がフェニキヤ人に取つて代つた様に、南方からフィリスチナ人を驅逐したのである。

兎に角、以下述べんとする事實は、前第二千年紀の初頭に於て、ラス・シャムラが既に重要な都市であつたことを證明してゐる。又その聖殿は第十二王朝時代のエジプトに關聯のあるものであつた。前第十五、第十四世紀に於て、この町と神殿が頗る繁昌してゐたことは、ミネト・エル・ベイダに於けるその君主達の陵墓によつて知られる。

前第十三世紀に於ては、この町は、疑もなくケタ人（Hittites）のこの地方征服後、一時衰亡を來たしたが、その最後の滅亡は前第十二世紀に於ける新時期、卽ち鐵器時代の曙に置かれる様である。

（a）ラス・シャムラ

最近發見せられた土版によれば、この市丘の恐らく最北端のところに、杉材を以て覆ひ、煉瓦の壁を繞らした神殿が在つたに相違ない。アメン・エムヘト三世（Amen-emhet III（1848–1801 B. C.））のカルツーシュ Cartouche（エジプト文字の中に王名又は神名を取巻いた楕圓環）のついた數個の見事なスフィンクス像の破片が澤山後に出來た新しい神殿の南方の庭で發見せられたが、これは元あつたこの舊神殿からのものであつたらしい。

後に述べる圖書室の北と西とには、前第三千年紀よりも以前の宏大な諸建築物（發掘報告によれば第三層にあり）がある。このアクロポリスの北方の斜面には集團葬よりなる墓地がある。その土器の遺物はエジプト第十二、第十三王朝のもの、換言すれば前第二十世紀から前第十六世紀に至る間のものである。この墳墓はこの長い時期の寧ろ終末に屬するものである。その或るものは恐らく牧王（ヒクソス）時代、卽ち第十八王朝の初頭に屬してゐる。

眞の納骨堂が發見せられた。その一坑道（トレンチ）には四十餘體が收めてあつた。その土器は、中期靑銅器時代にキプロス島から渡來した若干の花瓶と共に、前第二千年紀の前半に屬する所謂カナーン型（Canaanite type）土器である。これは前第十九世紀から前第十六世紀に亙る年代を決定する。

破損した小像の上に二度反覆せられてゐる銘文中、その最も興味ある部分は、その像がエジプト第十二王朝のセヌスレト二世（Senusret II 1903–1887 B.C.）の后となれる『「美しい王冠」を戴ける女性』ケネムト・ネフェル（Khenemt-nefer）內親王を像つたものであることを告げてゐる。これはエジプトの王室が至大の尊敬をこの聖殿に拂つてゐたことを示すものである。

牧王時代の甲蟲狀護符に附いてゐる楕圓環內には、下エジプト、エルサレム、ギゼー（Gizeh）、メギド（Megiddo）、エリコ（Jericho）に於て發見せられた同じ名を有するものと似寄つた、アヌラ（'Anr a, 異綴 Zr 'a）の名がついて居り、牧王時代の末端、前第十六世紀へと溯るのである。第二層の墳墓の中に發見せられた靑銅器は、この金屬が專ら武器及び裝飾品の製作にのみ使用せられてゐたことを示し、農具には原始的材料がなほ使用されてゐる。

それ故それ以下の地層はエジプト第十二、第十三王朝、卽ち前第二十、十九、十八、十七、十六世紀に相當し、上部の埋葬は牧王時代卽ち第十八王朝に屬し、この第二層は前第十五世紀及び第十四世紀の聖殿がその附屬建築物及び圖書室と共に、同じ式地に建立された頃には、最早や使用されてゐなかつたのである。

同じ場所の、しかしその上層（第二層）にある墓地（ネクロポリス）は、後に述べるミネト・エル・ベイダの第四號及び第五號大墳墓のある墓地と似寄つてゐるが、

其處に發見せられたキプロス型及びミケネ型の土器は、前第十四世紀或は前第十五世紀にまで溯るべきものである。

圖書室の西南には、ミケネ型大墳墓が存在し、三・一〇米に三・七五米の平面に、高さ三米の方形の室を有し、その建築は特に見事である。持出し穹窿は『華麗な槍鋒狀の筋違骨を形造り』、八段の階段と三・二〇米に一・四〇米の羨道（dromos）により達する。その洞室（ケーブ）の中央には床板の下に隱されて居る壁を繞らした圓形の竪穴が、瓦（タイル）の下を流れる暗渠によつて、瓦張りの現在の床面に切り込んだ溝に通じて居る。かくしてこの水路に注ぎ込まれる灌奠はこの穴に流れ込み、それから墳墓中の屍體に灌がれる。この墓はずつと以前に盜掘されてゐるので少ししかないその副葬品はミネト・エル・ベイダ第六號墳のそれと類似して居る。それ故この兩墳墓は前第十四世紀の終末まで行かずとも、少なくとも前第十三世紀まで溯り得るものである。

この層の少し上には、恐らく近くの神殿と關係のあるらしい前第十四世紀の水盤、碗、石の卓子などの禮拜用の設備がある。又更にその上層には個々の埋葬がある、卽ち少しばかりの家具と一緒に二三體が土葬にしてある。この墳墓の穹窿が圖書室の床面よりも高いこととその他若干の事實は、その墳墓が圖書室よりも後の時代に屬することを斷定させる。

ラス・シャムラ丘の最北端に非常に厚い壁面を以て圍まれた大きな神殿が在つた。その北方の中庭にある大きな切石造りの頑丈な建造物は祭壇の用に供した壇であつたらしい。僧侶は階段を通つてその前に近づいたものゝ樣で、その階段中の踏段一個が發見されてゐる。この壇上には花崗岩、綠石、沙岩等の（エジプト式の）彫像の斷片が在

り、その或る者は等身大であつて且つ新帝國時代の樣式を具へてゐる。壞れた石片から殆んど完全に修覆された赤沙岩の碑（ステーラ）は例の特色を有するシリヤ人のバール（Syrian Baal）を表はしてゐる。この神前に祭壇があつた。又その神殿の外部でハトル（Hathor）を想起せしめる女神の薄肉彫〔確かにバーラット・ツァプナ（Baalat-Tsapuna）である〕が發見された。疑もなくバール・ツァプナの男神の碑はシリヤ人のバール、又はケタ人のテシュップ（The Hittite Teshup）又はエジプト人のセテク卽ちセット（Setekh or Seth）の形狀と象徵を示してゐる。又他の碑（一九三二年發見）は右手に權標を振り廻し左手に槍を持ち、その尖端を地面に着けて直立せる神像を現はして居る。この武器の上端が分岐してゐるのは雷電を象徵したものであらう。この神は非常に尖つた兜と二本の角のある前立を着けて居り、その毛髮は長い總をなして後背に垂れ、右の肩を越してゐる。そして腰卷のみを纏ひ廣い帶で縛つて居る。彼の正面の臺座には、小形ではあるがこの像に或る種の重味を加へてゐる長いシリヤ服を着けた像が立つて居る。これは果して地方神を表はしたものか、それとも僧侶を表はしてゐるのか斷定し難いが、この主像は確かに地方的バール神を表はしたもので、恐らく雨と雷電と暴風の神なのであらう。

更に神殿の外部に、故意に埋めた瓶の中に、銀の小さな立像が二個這入つて居り、瓶には細かい土壤が一杯詰つてゐた。その中、男性の像は胸間に十字架樣のものを掛け、首の周りには頸飾りを着け金箔の腰卷を纏ひ、金色の腰帶で支へられ、これには金の懷劍が差されて居る。又女性の像は衣服を着てゐる樣に見え、これが金箔の廣い腰帶で止めてあつた。この二像は明かに男神及び女神の像である。

ミケネ型墓地の遺蹟には圖書室が建つてゐるがその壁はこの地方に多い地震の害を避けんがために、亂接と附柱とにより巧に造られて居る。又この建物はそこに發見された習字帖や作文によつて立證される通り、書記生養成の學校でもあつた。

(b) ミネト・エル・ベイダ

墓地は、羨道によりて達する持出し穹窿の墳墓と儀式用の竪穴とから成り、その或るものは、土器、青銅製武器、紅玉髓の玉（ビーヅ）、薄綠色の磁器製の美しい杯(Goblet)の破片などに富み、金銀で飾つた青銅製の小像や、エジプトの二重王冠をつけた青銅の鷹や、又その爪の間に蛇徽章を支へ、金を鏤めた別個の鷹や、白鑞と銀を入れた眼をもち、腰の廻りに腰帶を着け、脚にはその足部に達するほどの衣を纏つた神の坐像等を藏してゐた。他のもつと遙かに重要な小像は、高さ二十二センチのもので、これは右手を擧げ左手を前方に差出して歩行しつゝある神の姿を現はしてゐる。その頭上にはエジプト人の頭飾(Pshent)に類する高い頭巾、卽ちケタ諸王の頭被を戴いてゐる。その上體は銀の胸甲の中に嵌り、手足には銀の腕當と脛當を着け、その上、右手には金の腕環を嵌めてゐる。この神はラス・シャムラの碑にある神と同樣に、レシェフ(Reshef)、テシュップ及びセテクの諸神の特性や屬性を有する地方的バール神であることが疑はれない。この小像と接觸して、薄い金の板を重ね合して造つた環と垂飾があり、その幅廣き金箔には打出し細工でエジプトのハトル女神の例の姿態で立てる裸婦を表はしてゐる。これは、恐らく愛と生殖の女神アスタルテ(Astarte)であるらしく、エルサレム及びギゼーの小土偶版や、ベイザン（Beisan）發見の金の垂飾に於けると全く同じ樣式に現はされてゐる。それにハトルを表現した

小土偶版と透し彫のある碑と大きな石の陽相像（Phalli）が、副葬品の埋藏物の中に發見されたことが注目される。

又同墓地の他の場所には、金や銀や鐵製の玉（ビーヅ）と環や、赤鐵鑛の圓筒（シリンダー）、象牙製楕圓形の小函、及び上體は裸形であるが、幅廣の裳を着けて祭壇の上に靜坐せる女神の構圖を極めて美麗に彫刻してある蓋などが發見された。その女神は兩手に穀物の穗を持ち、その兩側には野生の山羊が後脚で立ち前肢の一方を臺座樣のものの上に載せ、他方を擧げて女神の腕に迫つてゐる。この樣式はミケネ型である。南方の斜面にある墓地に於ても同樣の發見がなされてゐる。

又二個の大きな建築物（その中の一個は十三個の室と廊下とを有する）が注意されるべきである。それは會堂と通廊より成り何れも明かに持出し穹窿の墳墓と關係の有るものである。是等の埋葬記念物はエジプトのマスタバを想起させる。

一番古い埋葬は、前第十四世紀乃至前第十三世紀に先立つてゐる（この點は一九三三年に發見された）。更に前第十五又は前第十四世紀の初にすらも溯り得るかも知れない。ミケネ型の彩色土器の痕跡はその中には見出されなかつた。副葬品は骸骨を取卷いた多數の瓶、bilbils 及び平底の碗、就中深い赤手土器の長い壺ばかりよりなる。キプロス型の壺に比較せられる是等の壺は次の假說を生む。それは是等の壺を出した墳墓は、その港がサラミスに向き合つてゐるラス・シャムラへの貿易により誘はれたキプロス移民の墳墓であつたらうといふのである。

前第十四世紀乃至前第十三世紀に屬する大きな集團墳墓の第五號から出土した土器はミケネ型土器であつて、キプロス及びロードス型土器に類似し、その壺の底には竈に入れる前に描いた赤い記號が附いてゐる。この種の土器はすべてロードス

の工作場から渡來したものらしく、之はロードスからエジプトや特にエル・アマルナ(el-Amarna)に移出されてゐる。

第六號墳墓は三・五〇米に六・五〇米の大さを有し、ミネト・エル・ベイダに發見された最大の洞窟墳墓であつて、數代に亙つての骸骨を少なくとも二十八個藏してゐる。墳墓に通ずる小さな地下室は後の埋葬のために餘地を必要とするに至つて前代の骨を收めることになつた。この洞窟墳墓からは、金環や玉(ビーヅ)は發見せられたが、既に古代に於て盜掘されてゐる。陶器の瓶、杯、皿、壺、軟質磁器、白色及び斑入り硝子等は、極めて豐富に出土した。二色又は三色で彩色した婦人の假面を、その裝飾とする高杯は、特に注目に價するものである。ミケネ型土器の品質から判斷すれば、この墳墓は前第十三世紀に製作されたものでなくてはならぬ。

第五號墳と第六號墳との間にある地面は、一個の大きな建築物に占領されてゐて、それには互に隣接し合つた露天の中庭が澤山存在するが、それ等は前第十四、第十三世紀に溯るものであつて、中には恐らく前第十五世紀に屬するものもあるだらう。何れも平滑な混凝土で出來た二層建からなり二階には石の大水盤或は灌奠用の容器が發見せられ、且つこの灌水は溝又は土管によつて階下に排流する仕組になつてゐる。既に古代に於て盜掘を蒙つてはゐるが、この中庭に於ては、ミケネ型偶像や裝飾品や靑銅器の間から金の垂飾と玉の如き貴重品が發見された。この土管の內側に附着してゐる石灰質の沈澱物は灌奠が長い間續けられたことを立證する。

この溝が墳墓の內部に終ることなく土壤中に達し、又この中庭の多くには寫實的な大きな石の陽相像が、等しく暗示的な女性像の傍に置かれてあ

ることが發見されたので、大地の多産性、恐らく人間や家畜の生殖力をも目的とした魔術的效驗のある禮拜が、こゝで行はれたことを推測させるのである。

上層に於ては玄關と殯室の二部からなる一墳墓があつて、可耕的な地層から全部發掘された。ここで發見した瓶はシドン（Sidon）地方のカナーン型土器や、前第十三世紀乃至前第十二世紀の土器片と類似してゐる。

この墳墓の西方にある他の埋葬は動物模樣のRhytons（魚類や馬頭）や章魚模樣やミケネ式水蛇などの附いた喇叭狀のリトンを出した。又夥多の埋藏物の中には、青銅製武器及び器具、キプロス系統の短劍、スメル系統の耨、エジプト製斧、數束の鎌、大きな十能、スフィンクス又は有翼の守護神を彫刻し、大きな楕圓環のついた銀環、赤鐵鑛の圓筒（シリンダー）などがあつた。

是等の埋藏物は儀式的配置に直接關係があり、又、混凝土の層を以て覆はれ、入口のない、孤立又は互に隣接した地下室に直接關係があるのである。その下には矢のついた水瓶や短劍や若干の青銅器やその傍に見事な雪花石膏製の花瓶が發見せられた。又地下室の傍には井戸や空井戸（wells or false wells）があつて、石の導水渠又は土管が之に通じてゐる。

この墓地の壁には一個の棚があつて、奉納の土器を以て被はれてゐることも空なることもある。それから少し隔つた處には角型の祭壇があり、その近くに石の圓錐臺が發見された。これは betyl 卽ち祭壇の一種である。無孔質粘土の中に嵌めた大形の水槽中には、無數の土器の破片や數個の嬰兒の骸骨が容つてゐた。これは人身御供の行はれたことを自然に暗示するものである。

この建築群の少し北寄りの處に、一群の室や供

物の土器を載せた一枚の石で蔽はれた井戸と階段のついた祭壇があり、さもなければ水路を通じた灌奠祭壇の形式に屬するものがある。

この最後に擧げた祭壇の明かに背後の境内には約一千個の花瓶や、Bilbilsや、鐙形の把手のついた大きな梨形水瓶とか、クリート型胴體に白色の裝飾を施したものとか石花石膏製のエジプト型の壺及び花瓶があり、又二個の青掴土製の見事な楕圓形の甲蟲狀の護符(Scaraboid)があつた。その中の一個は沈み浮彫(Sunk relief)で男神を現はし、上エジプトの白い王冠を想起させる蛇徽章と非常に長い射光(Streamer)のついた高い頸飾を戴いた立像がある。この神像は左手には楯を持ち、威嚇する樣な身振りで右手を差し上げてゐる。又この神像の左側には『生命の記號』があり、下にはセト(Set)神の象徴である節(nub)のある首飾がある。他の甲蟲狀の護符に刻まれた女神は疑もなく前記の男神の配偶者であつて、蛇徽章がその前額を飾り、その長い上衣はその胸を露出させてゐる。又左手には『生命の記號』を持ち、足の下にはセト神の節(ナブ)のついた首飾がある。

以上の出土品は約一百頭の羊の骨の集塊の中から見出された。

同じ境内の丁度麓の處で、數個の金の垂飾具が『裸體の女神』を表はしたそれの垂下した環と共に發見された。その中の一個にはハトル神の頭飾を着けたこの女神が、何れの手にも野生の山羊をもち、女神の下界的な性格は恐らく二匹の蛇によつて示されてゐる。その空地にある點々は恐らく星を表徴したものであらう。ラス・シャムラの萬神殿には、アシェラート(Asherat)、アスタルテ、アナート(ʻAnat)、の三女神があるが、その何れがこゝに表徴されてゐるのか判然しない。

この金細工の複合的な樣式はシリヤ式なのであ

らう。

ミネト・エル・ベイダの墓地は、四個の大墳墓を有するに過ぎないが、その富裕な點より判斷すれば、頗る重要なる人物、卽ちラス・シャムラの君主か王者の陵墓なのであらう。

他の建築物及び記念物等は禮拜の中樞を示してゐる。換言すれば、ラス・シャムラの土版に說かれてゐる『レファイム』(Rephaïm) 卽ち死せる貴顯の靈魂を祀る儀式を執り行ふ聖殿を示すものゝ樣である。

發掘された數多の埋藏物、特に故意に埋藏した瓶を藏してゐる坑の中に開いてゐるそれ等は、死者の禮拜と生殖力の禮拜との間に關聯があつたといふ假說に、至當な根據を與へる樣に思はれる。

是等の出土品は前第十五世紀から前第十三世紀に亙るものである。しかしこの墓地は前第十二世紀から放棄せられてゐる。鐵の痕跡は全く見出されなかつた。

二　宗　教(一)

ラス・シャムラの出土品によつて立證される所によれば、フェニキヤ人の宗教は全く神人同形的要素の禮拜から成立つてゐると言はれやう。

(一) 本問題につき Dussaud 氏は Revue d' histoire des religions の中に重要なる論文を書いてゐる(原註)。

(a) パンテオン

ラス・シャムラの萬神殿(パンテオン)には人間は這入るべき餘地がなかつた。動物の表出は稀であつて、二次的なものである。たゞ人間の形を借りて、諸元素や自然現象の力或は靈を表現した神にのみ出會うのである。アシェラート、アスタルテ、エラート(Elat)及びアナートなどの女神にあつては、その性能が明白でない樣である。

人間と之に恩澤を施こす崇高なる神々との間には代理者と仲介者が居る。崇高なる神々は、嚴密に言へば、それ自體繁殖力を表現する（represent）ものではなく、彼等がこれを表明する（manifest）のである。

『エル』（El）(一)。　日神エルはフェニキヤ人のパンテオンに於ては主神であつて、『王者、歳父』である。その命令がなければ何事もなされない。カナーン人の國土は全くエルの國と定められてゐる。エルはその子ラトポン（Latpon）のために、その全勢力を表明した。卽ち『賢者エルは汝に永久の叡智を許した』のである。

（一）聖書の傳説によれば、家長達は非常に古い時期にエルを彼等の神と認めた（創世記三三の二〇、ヤコブは「イスラエルの神エル」に祈願してゐる）（原註）。

彼は『諸川を深海に明けさせる彼』である。シブ・アニ（Sib 'ani）の母、テラク（Terakh）の妻なるフェニキヤ人の運命に興味を持てるはエルであ

る。

エルはフェニキヤからシンヂイルリ（Sindjirli）へ入り、更にシリヤの北全部に及んでゐる。エルは次第にハダドと同じものとなり、ローマ時代には、ヘリオポリスのジュピター（Heliopolitan Jupiter）と同化するに至つた。

『ショール・エル』（Shor-El）。　この名は折々エルにも與へられた。『牡牛のエル』を意味する『ショール・エル』とは恐らく至上神の偉力を具體的な姿で表はすためにかく呼んだものであらう。又このショール・エルなる名稱で、彼は日の女神スプス（Sps）やモートの父と呼ばれてゐる。

『バール』（Baal）。　海のアシェラートの子で、エルと同じテキストの中に、エルの次ぎに記されてゐる。バールは雷神、嵐の神で、又慈雨の神でもある。それ故ハダドと同じ機能を有してゐる。『彼は雲の中でその聲を聞かせる』…彼は『その神

聖な言葉を述べる』……彼は電光を放ち雨を降らせる。このテキストはこの神が牡牛の力を出して闘へるところを示してゐる。

『バールの力よ、（その）力は野の牡牛の如く、その角もてモートを撃つならん。
バールの力よ、（その）力はバシャン（Bashan）の牡牛の如く、モートを八つ裂にするならん』。

この牡牛はハダド神に事ふる動物であつたといふことが知られてゐる。

バールはアシェラートの配偶者である。それは『海のアシェラート』であつても他のアシェラートであつてもよい。しかしこゝに注意すべきはこの至上神バールは諸地のバールと一般に區別されねばならぬのであつて、諸地のバールはそれ〴〵大に異つてゐる。是等地方神の中、最も著名なのはバール・ツァフン、バール・ツァプナ或はツァプナと呼ばれるバール（之はバールといふ語が常にツァプナの前にあるとは限らないからである）である。

『アレイン』（Aleyn）。バール・ハダドの子である。アレインは波濤、源泉、河川に住める肥沃力の靈で、野の草や森の種々なる木の茂みに姿を現はす。その活動の領域はその父に比し大に限られてゐる。又その機能は彼より發する水分の働きによつて諸神及び人々を肥らせることである。

アレインの力は別して雨季に發揮せられる。その敵はモートである。收穫の靈モートは、大地の神であつて、灼熱の太陽により乾かされる。それ故アナートはアレインに向つて叫ぶ、水を地上に氾濫せしめてこの敵を逐ひ斥けよと。彼はすべての綠野を萎縮させる暑季にその姿を消す。そこでエルはアシェラートからその息子の一人を貰つて、この死に絶えた神に代はらせる。卽ち彼を繼げる神の御子はモートなのである。

『モート』（Mt）。收穫の生育の靈である。エル

のこの崇高なる御子モートは夏の太陽の灼熱に關係してゐる。（エルは日の神である）。今述べた様に、アレインの死後その後を襲ふものは彼であるが、次いで彼がアナートに殺された時、アレインが蘇生する。常に忘れてならぬのは、死を寂滅と信じないで、微かな生存が認められてゐたことである。

『アナート』（'Anat）。この女神はカデシュ（Qadesh）と同じに見られてゐる様である。女神はバールの子アレインの妹であつて、しばゞ〳〵處女として說かれてゐるが、女性ながら極めて鬪爭心に燃えてゐた。

モートがアレインを殺した時、彼にその兄を返せと要求したのはこの女神である。又女神はモートの一味に追手を差向け、モートを捕へて斬り殺したのである。

モートは生育の、特に穀物の生育の靈である。女神アナートは穀物の一束をとり、その穗を切り穀を脫して穀粒を苛りそれを手臼で搗き碎き、次いで苛つて碎いたこの穀粒をば野に散らばした。次いで女神は膨らんだパンを食べることが出來た（これはその前まで女神が膨らまぬパンで我慢しなければならなかつたことを意味する）。事實この女神は一柱の神を犧牲にすることによつて、穀物の生育を司る靈を地上に復歸せしめた。かくして女神はその消費が許される様に、收穫を俗用に供したのである。

この禮拜卽ち祕儀は頗る廣く行はれた。それは現在の收穫を保有することを許した上に、將來の收穫をも保證したからである。季節の調節を圖るものゝやうに思はれてゐる魔術的儀式は、いつも『榮養と生殖』を目的としたものである。

『カデシュ』（Qadesh）。この『聖神』（Q-d-š）はアムル（A-m-r-r）に配されてゐる。事實この『聖』

なる言葉は、この Q-d-š なる名でシリヤ人の女神として既にエジプトのテキストの中に知られてゐるアナート女神の尊號である。エジプトの文書ではこの女神をレェシフの連れ添としてゐるが、ラス・シャムラのテキストでは、前述の如く Q-d-š を A-m-r-r に配してゐる。それ故 A-m-r-r 卽ち Amurru はレシェフであるか或はレシェフと同化したことになる。

『アシェラート』(Asherat)。　ラス・シャムラのテキストでは、この女神はアスタルテと明白に區別され、通例レシェフと一緒にされてゐる。獅子の脊の上に立つて、何れの手にも野生の山羊を牽ゐ、一匹の蛇に護衞されてゐるこの女神は、恐らくアシェラートを表現したものであらう。これ獅子はいつでもバール・ハダド神のつれそひを表徴して居り、ラス・シャムラのテキストではこの配偶者はアシェラートであるからである。

『海のアシェラート』(Asherat-of-the-Sea)。　この神は母神ではない。その名は餘りにも明白に彼女の海の特性を示してゐる。それにも拘らず、この神は諸神の母であり、七十子がその子とされてゐる。バール・ハダドはその子である。

『アスタルテ』(Astarte)。　この神はバビルスの花のついた長い莖と二葉の蓮を手にして立つてゐるラス・シャムラの裸形の女神であるかも知れない。彼女は時を經るにつれ、『アタル・アテ (Atar-Ate)(一) の姿をとれるアナート』となつてゐる。

(一) Astarte, Attar, 'An(a)t, Até が交互に用ゐられる。

エジプト人はアスタルテとアナートを採用した。そのテキストの中にはしばゞ〳〵女神カデシュのことを述べてゐて、その像は直に前の二女神を想起させる。この女神は常にハダドに相當する男神レシェフと一緒に置かれてゐるので、前述の如く、多分カデシュとは、ラス・シャムラのテキス

トの中にバール・ハダドと一緒に置かれてゐるアナートの俗名に過ぎないものであらう。

『スプス（Sps）。この『日の女神』はエルの娘である。

『シュカムナ』（Shukamuna）。これはメソポタミヤの女神である。

この他、ラス・シャムラのテキストの中には、ヤブ（Yav）、アムル（Amurru）、ダゴン（Dagon）、ミルコム（Milkom）、ネル（Nel）、シャカル（Shakar）、シャレム（Shalem）、エラート（Elat）の名が記載されてゐる。この中にもシャレムはエルからアラビヤ人に對する統治權を授かつてゐる。

（b）人種的及び宗教的傳說

すぐに述ぶべき正文（テキスト）によれば、テラク（Terakh）〔一〕とは月の神或は他の人物の名であり、シン（Sin）は（メソポタミヤでは月の神である）その妻の名であつて、ニカル（Nikar）〔二〕はその情婦の名である。エルの言葉に從ひ、シンはその夫にアシュドド（Ashdod）の建設者シブ・アニ（Sib 'Ani）と呼ぶ息子〔三〕を與へた。エルは後ちこのシブ・アニを沙漠に遣はした。

（一）Etakh といふ異綴が第一のテキストに引用されてゐる。テラクといふ語はYerakh（月）のカナーン形である。

（二）之は疑もなくバビロニヤで月神シンの連れ添なるニカル・ニンガル（Nikkal Nin-gal）から派生したものである。

（三）アブラハムがテラクの子（聖書ではテラ、彼は多神教徒であつた。約書亞記、二十四の二）であり、その妻に子なかりし故に、ハガルが彼に一子を生めるとき、彼女は沙漠に逃れた。又創世記の物語に（創世記第十六章）、彼女が見えたと信ずるはエルである（十三節）。第二話はエロイヒスト（Eloihist, 神をエルと唱へた著者）で、彼女の子はイシュマエル（Ishmael, 神きこしめす、神聽知）〔El 聞けり〕の名が與へられた。

小兒シブ・アニよ、嗚呼エトラクの妻よ！
彼はアシュドドを建つるならん！
汝！ ḏ をカデシュの沙漠の中央に建てよ！

なほ未發表の傳說は（次の簡單なテキストはその中のものである）『慈悲深き神々』の詩と一致する樣には見えない。この詩では沙漠に逃げ込まねばならぬのはテラクの妻と妾である。

テラクは新月を昇らせる。
彼はその妻シンと
その愛人ニカルを逐ひ出した。
汝等は蟋蟀の如く野に、
蝗の如く沙漠の緣邊に住めよ……（と言ひつゝ）

（c）禮拜

この禮拜の主たる目的は住民の食糧を保證するにあつた樣であつて、それは降雨と密接な關係を有する。このために人格化した自然力を支配し、四季の調節を保たんとする努力が拂はれた。『神殿』。バール・ハダドの神殿の建造を主題とする詩がある。神々が人間の行爲を支配してゐるホーマーの詩と相違して、フェニキヤのテキストは神のみを取扱ひ、神殿を建つる者は神々自身なのである。神々の目的は彼等の鬪爭を終らしめること、別言すれば解き放たれた諸元素を和らげ、四季の運行を調節するにある。

先づ第一に、建築の準備がなされる。工人として鞴と鐵鉗を用意した一人の神は、金を熔かしてそれを打ち伸ばすのである。

彼はこの神殿の主人の牡牛（の小像）を銀で、
（又他の物を）金で作る。

彼は又神エルのために玉座と（すべてエルのために）豐富な供物を充たした金色の卓子を作る。

エルから智惠と不滅を授けられたラトポンは自から製作に當り、次いで他の者共が加つた。この詩の終は、バールの神殿の建築がアレインとモートの各に、その支配を分擔せしめて、諸元素の安定を目的としてゐることを示すのである。モート

が墓中にあるとき、アレインは『神々や人々を肥らせた』が、その傍に在るときは最早やモートに反對してはならなかつた。『犧牲』。『單なる供物』。これは神々に供へるために卓上に置かれる。

おや、彼等に飲物を與へよ。
卓上にパンを置け、パンを。
(さうして注げよ)瓶に葡萄酒を、
黄金の杯に、木々の血汐を。

この他にも犧牲がある。獸を丸燒にして神前に供へるところの大燔祭 srp とか、又、裁判(?)に勝たんとする犧牲 dbkh とか dnt 或は燔祭 est などがそれである。

神殿を建築する時捧げられる犧牲に於て nblat といふのは、est に相當する。

今日も、明日も
汝は聖殿に燔いた(供物)を、神殿に nblat を置く(?)
ならん。

明後日(と又)その次の日も
汝は聖殿で燔祭を、神殿で nblat を食べよ。
第五日と第六日にも
汝は聖殿で燔祭を、神殿で nbiat を食べよ。
かくして七日の間
汝は聖殿で燔祭を、神殿の中央で(?) nblat を食べよ。
汝は感謝の供物として聖殿に燔祭を、神殿に nblat を捧げよ。

三 文學

(a) 言語と書法

楔形文字の土版がラス・シャムラに發見せられその中の一群が極めて特殊の興味のあるものであることは、既に述べたところである。

その第一類はアッカド語、又はスメル・アッカド語の文書であつて、換言すればバビロニヤ語の文書からなつてゐる。先づ第一に、是等は語彙を記した十一個の破片からなり、その中若干のものはスメル語のみから成り、他のものはスメル語と

竝べてそれに相當するアッカド語を記してある。又一破片にはスメル語と併せて、それに相當するミタニ語（もつと正確に言へば、西方のアリヤン語系の一派生語 The Sub-Aryan）に似寄つた言語が記されてゐる。隨つてそれはこの土版の書かれた地方に於ける住民の少くとも一部の者の共通語であつたらう。最後に二通の手紙はエル・アマルナのそれと類似して居る。是等はエジプト第十九及び第十八王朝の時代に於て、北部及び中央シリヤのみならず海岸地方がフェニキヤに至るまで、ミタニに服屬してゐたことを示す樣に思はれる。

他の種類の土版の中に記してあるテキストは楔形文字で書かれ、是迄全く知られてゐない所のアルファベットが存在することを示した。

それ故ラス・シャムラには、エジプト第十九王朝の時代に二種の異つた書法が存在してゐた。國際用に宛つるためには、近東全地方に於ける如くアッカド語の書法が使用せられ、私信には綴音文字とその地方の言語が使用されてゐたのである。

このアルファベットの書法は、前第十三世以前の實例を存しないが、十分に完成してゐるので、長い間使用せられてゐたに相違ない。

この時期はラス・シャムラの文學上の眞の黄金時代であつた。

合計一千行に亙る約十個の土版は、敍事詩やその斷片を含み、この敍事詩は『レファイム』卽ち死者の靈魂に捧げる供物及び犧牲の光景について神々の間又は男女の諸神と一英雄との間に於ける對話からなつてゐる。

ラス・シャムラの是等のテキストや北フェニキヤのテキストにより暴露された方言で記載されてゐる語彙は、アリヤン語系の一派生語と竝べて、又上に重ねて記されてゐるが、この語彙はバビロス（Babylos）やシドンのそれとは寧ろ異つて居り、

全體に於て聖書の諸篇に記載されてゐる語彙と同じものである。冠詞はフェニキヤ語ではヘブライ語より遙かに稀であるが、ラス・シャムラに於ては全く存在しない。絶對的意味での女性は必ず終詞 t を以て現はされてゐる。構成形の複數は少しも變化しない。動詞は通例 ,,gal'' なる語形を以て始め、shaphel 並に使役動詞のあることアッカド語及びアラム語(Armaic)に於けると同じである。最後に希求法はアッカド語と同様、接頭語 l によつて恐らく表現されてゐる。

(b) 詩

(イ)『神々の御子モートとバール神の御子アレインとの爭』。この詩は一土版に六段に記されてゐるが、その下方の部分のみが保存せられてゐる。(某)が至上神エルと女神アシェラートの御前に送られる。この至上神の住まへる國は『エルの國』と呼ばれる。使者は『歲父』の住み給ふ館に入らねばならぬ。某は先づこの至上神に懇願しなければならぬ。屹度バールの御子アレインの後繼者を指名なされます樣にと、この至上神にお願ひしなければならぬ。更に彼は就中アシェラートを首領とする諸神を『喜ばすやう大聲で叫ぶ』ことを命せられる。

エルは使者の禮を受け、その禮により乞はれた願事を許容するや忽ち女神、海のアシェラート孃を顧み、今は亡きアレインの後繼者を與へんことを乞ふのである。この女神は最初は拒絶するが、次いでその子分のイシュタール・ルフ (Ishtar, rf) を前に進ましめる。後者はこの任を引き受ける。

アレインの妹のアナートはモートを攻擊し、彼にその兄アレインを返せと要求する。モートはアレインの死後、繁榮が失はれて了つたので、凡ゆる手段を盡して、その罪を償ふべき覺悟を表明す

る。彼はこの地上を牧場（又は野）に變形すべき、明かに魔術的な、液體を求めに出發する。

アナートは重ねてモートを攻撃する。この詩句の一節に於て、モートがパンを作る穀物の穗と同じに見られてゐることが明かである。モートは死なねばならない。しかも一女神の手で、極めて好戰的な女神の手によつて彼は斃されるのである。女神は身をもつて彼に當り、鋭利な偃月形の收穫鎌で彼を倒す。『彼女は扇で簸り別け、火で燔り、臼で挽く。彼女はあらゆる工夫を凝らして生育の神の實體を以て身を養ひ、亦疑もなく諸神及び人々をも養はんがためにあらゆる工夫を凝すのである』。

約三十行の缺文を置いてその次ぎの詩句の中にアレインの復活が記されてゐる。ラトポンは夢の中に、『喜びの音づれよ、あゝ我が生みの兒よ、天は豐饒を雨降らすならん、谿は（肥沃に）なるならん』と唱ふる聲を聞くのである。この復活の報知に彼は雀躍する。

次にエルは處女アナートに、女神スプスへの使信を委ねる。卽ち彼女をしてアレインの隱れ家を暴露させよ。彼は復活以來その姿を見せないのである。而して容易ならぬ危險が田園と又エルの全土を脅かす。

〔第五段〕　アシェラートの子にしてアレインの父なるバールは、モートの周圍に仕ふる諸神に、且つ最後にはモート自身に挑戰する。

七歲の後、モートは彼がアナートにより宛てがはれた刑罰を、アレインに加へるぞと言明する。アレインはモートに對し侮蔑を浴せかけたが、女神スプスは彼の沒落を豫言する。モートが地獄へ下るとバールがアレインを彼の玉座に復する。

（ロ）　その他の詩は斷片的で、特に解釋に困難であるが、最も長文である。これはバールの神殿

及びその他の建築物の築造を主題としてゐる。これは元來はバールが他の神々と同じ特權を享有してゐなかつたことを示すものゝ樣である。

〔第六段、八七―九七〕諸神に是等の歡ばしい報知を齎すものは、處女アナートである。

寶石工の長卽ちその主神は金銀の裝身具や容器の鑄造を命ぜられる。この町に建てらるべき建築物に關しての論議……

この詩に於ては、モートは最後に彼が一般に至上神エルのために保留してあつた名譽に略ぼ等しい名譽を享ける時までは出現しない。

（八）他の詩に於ては、思想の連絡を正しく述べることが困難である。（完）

附記

『その第七回發掘作業は昨秋を以て一段落となり、最近その事業報告が公表された』由で、その簡單な『ラス・シャムラの發掘』といふ記事が、去る五月十九日の東京朝日新聞に出てゐる。

なほ『世界歷史大系』2、東洋考古學中（一九一―一九四頁）にはこれに關する記事があり、同處にミネト・エル・ベイダの第三號墳及び象牙彫刻の豐穰の女神、並にラス・シャムラ發見のバール神浮彫、圖書室遺址、楔形文字土版その他の圖版があり、又同書二四六頁の次には圖版十七がある。參照せられたい。